

いずれ最強の

SOMEDAY WILL I BE THE GREATEST ALCHEMIST?

錬金術師?

18

小狐丸

KOGITSUNEMARU

Illustration 人米

登場人物紹介

CHARACTERS

マーニ

兎人族のセクシー美女。
タクミの奥さんの1人。

カエデ

アラクネという
厄災クラスの魔物。
タクミに懐いている。

ハミット

異端の鬼才錬金術師。
人体錬成を企む。

???

異世界の神。その目的は
謎に包まれている。

タクミの家族&従魔

TAKUMI'S FAMILY & FOLLOWERS



エトワール



春香



フローラ



ベールクト



フルーナ



ツバキ



タイタン

マリア

家事もバトルもこなす
美少女メイド。
タクミの奥さんの1人。

ソフィア

タクミの護衛を務める
エルフの剣士。
タクミの奥さんの1人。

タクミ

ちょっぴり臆病な本作の主人公。
剣と魔法の異世界に転生したが、
喧嘩もしたことがないので
生産職を究めようと決意する。

1 中型機

創世の女神ノルン様の神託から始まった離島の救済、大陸規模の疫病対策、そして再び離島の地下水脈浄化と、半年以上にわたる長い期間のミッションを終えた僕——タクミ。

ただ、離島への聖域騎士団の長期派遣は、思ってもみない問題が……いや、問題って言うとなんだな。一応、祝福するべき事だもんな。

長い期間派遣するとなると、聖域騎士団の中でも若手が優先的に選ばれるのは仕方ない事だった。その騎士団の若者と、離島の年頃の女性が恋仲になるなんて想定外だったよ。

そこで聖域騎士団の団長であるガラハットさんから、小規模でもいいので、駐屯地を維持出来ないかと相談された。

まあ、断れないよね。

島の女性を聖域に移住させるって方法もなくはないけれど、離島で生まれ育った彼女達は、家族と遠く離れた土地には行きたくないらしい。

当然の話だ。せつかくこれから暮らしやすくなる島を出たくない気持ちは理解出来る。

それに島のためにも、外から新しい血が入るのはいい事だ。

この世界において、遺伝的に血が濃すぎて悪影響があるのかは分からないけれど、多分その辺は地球と変わらないと思う。

で、創世教の神官からも、同じノルン様を信仰する島の教会を継続的に支援したいと申し出があり、騎士団の駐屯地を維持する事が決定した。

その決定を受けて離島の駐屯地にて、輸送機のガルーダ用の滑走路はそのままに、騎士団が継続的に駐屯するための施設整備を行った。

もう既にかんりの施設や建物が建設されていたので、それをむしろ縮小して少人数でも管理維持しやすい規模に変更したんだ。

今は、避難民用の簡易住宅と騎士団用の簡易住宅だから、本格的に長期滞在可能な、快適な住居は必要だし、ある程度の防衛力を持つ拠点として整備する必要はあるだろうしね。

その辺は、ガラハットさんと騎士団員と相談しながらかな。

離島のアレコレが一段落したので、僕は少しの休暇をもらった。

神託が続いたせいで、僕的にもソフィアやマリアなど妻達から見ても働きすぎだったからね。

僕の助手であるレーヴァには悪いけれど、ゆつくりと休ませてもらったよ。勿論、子供達と思いつきり遊んださ。

その後、離島と聖域の人員の行き来をスムーズにするため、転移ゲートではなく、ガルーダよりもスピードが速く、垂直離着陸が可能で、かつ輸送能力のある機体を新たに造る事が決まった。

それに向けて早速僕は動き出した。

今日は、その中型輸送機の仕様を決めるための話し合いを行っているんだ。話し合いって言うても、今回は僕とガラハットさんの二人だけだね。

「サラマンダーを二台搭載するのはいいんですけど、あのサイズを出し入れしようとすると、それなりに大きくなりますよ。格納庫は空間拡張でどうしてもなりますけど、搬入口であるハッチの大きさはどうにもなりませんから」

「ううむ。運用する人数が人数じゃから、機体の大きさは抑えたい。しかし、現地での移動手段がグライドバイクだけというのな。騎士団用のグライドバイクは、三人乗りじゃからな。哨戒任務には向くじやろうが……」

最初ガラハットさんから、新たに造る予定の中型輸送機には、陸戦艇サラマンダーを二台載せられるようにしたいとリクエストがあった。

ただ、サラマンダーはそれなりに大きいので、搬入の事を考えると機体のサイズがどうしても大きくなってしまふ。

大型の輸送機であるガルードなら、ハッチも大きいから、サラマンダーの搬入は何の問題もない。ただ、それを今回造る中型機でとなると、中型の輸送機が大きくなって、中途半端なサイズになりかねない。

現地ではサラマンダーだけでなく、グライドバイクも使っているけれど、最大で三人乗りついでうのが移動手段としては弱い。

「そもそも、あの離島にサラマンダーは大きくて使いづらくないですか？」

「うむ。確かに、族長勢力の襲撃から拠点を守るバリケード代わりに使うにはよかったが、哨戒任務はほぼグライドバイクだったな。その襲撃も奴らが船で逃げた事で、二度目はおそろくなさそうじゃ。サラマンダーは大きすぎるか」

「ですよ。サラマンダーは悪路でも走れますけど、それでもほとんどな道がない離島では使いにくいと思いますよ。あの島、狭くて湿地も多いですしね」

「うゝむ」

要求される最低限の仕様は、飛行速度は速く、それなりの搭載量があり、垂直離着陸が可能。この三つか。

そこで僕はガラハットさんに一つ提案する。

「ガラハットさん。今後離島でサラマンダーを並べてバリケードとして使う機会は、ほぼなさそう

ですよ」

「うむ。逃げた奴らが戻る可能性は低いし、たとえ戻ったとしても、今の島民なら撃退可能じゃろうしな」

何故なら、残った島民の多くが魔大陸のダンジョンを使ったブートキャンプを行ったからね。

スキルもレベルも、あの島を支配していた族長達とは大人と子供くらいの差が出来た。装備だつて支給したので、二度と旧支配者達の横暴を許す事はないだろう。

「ならサラマンダーの代わりに、小型の装甲車両を新しく造ればいいんじゃないですか。それなら輸送機側のハッチも小さく出来るでしょうし、結果、輸送機の大きさもコンパクトに出来ると思うんです」

僕はサラマンダーに代わる新しい小型の装甲車両を提案した。中型の輸送機を造る話が、小型の装甲車両を造る話になっているけれど仕方ない。

そもそも離島に駐屯する聖域騎士団の人数は少ないんだから、サラマンダーは必要ない。もっと小型のもので十分だろう。

「……小型のサラマンダーか。いいかもしれない」

「ですよ。小型なら、道のない場所や湿地では、なんならグライドバイクみたいに低空を滑空させる事も出来ます。普段は、魔力を節約するため頑丈なタイヤか、無限軌道での走行にすればいい

んじゃないですか」

「ふむ。ありじやな。操縦士二人と観測士一人、あと十人も運べれば十分か」

「ですね」

「ではイルマ殿、その線でお願い出来るか？」

「了解です。小型のサラマンダーと中型輸送機でいきましょう」

ハマーやハンヴィーくらいのサイズがあれば十分じゃないかな。

あのくらいのサイズなら多少重くても、そんなに魔力を使わず浮かせられるだろうしね。

装甲車両だから、デザイン的にはラーターみたいな感じにしようかな。まあ、デザインはあとでいいか。

その後、ガラハットさんと、中型輸送機と小型のサラマンダーは何台必要か、装備する武装に関してなどの相談を少しして解散となった。

「はあ、またノームの鉱山通いか……仕方ないか」

中型輸送機は、二機で離島の駐屯地と聖域を行き来するので、最低二機必要なんだけど、ガラハットさんから聖域にも四機ほど欲しいと言われた。

まあ、当然だと思う。

で、小型のサラマンダーも四つある騎士団に各二台ずつ欲しいとお願いされ、僕の鉱山通いが決定したというわけだ。

さて、ほどほどに頑張りますか。

おっと、その前に、子供達の顔を見ておこな。

2 次回作

僕が中型輸送機と小型のサラマンダーの構想を練り始めた頃、サマンドール王国やトリアリア王国も疫病騒ぎが落ち着き始めていた。

勿論、影響がほばなかったユグル王国やノムストル王国は早期に普段通りの生活に戻っていたし、事前に対策をしていたバーキラ王国やロマリア王国も、収束は早かった。

とはいえ、何処の国も疫病による死者がゼロだったわけじゃない。国民の生活が困窮した地域もあり、どんよりとした空気に包まれているのはどうしようもない。

そんな暗い空気を何とかしようと動き出したのがアカネだった。
嫌な予感しかない。

案の定、リビングに入ってきたアカネがとんでもない事を言い出した。

「えっ!? 次回作!」

「そう。大陸規模の疫病流行が終息したとは言っても、対策が上手くいったバーキラ王国やロマリ王国でさえ、それなりに犠牲者が出たでしょう。そのせいで暗くなっている世間の雰囲気はどうにかしようと思ってるね」

「いやいやいや、それと次回作とどう繋がるんだよ」

「どうやらアカネは、映画の次回作を撮るつもりらしい。」

まあ、疫病のせいでみんなが大変というのは分かる。

いや、サマンドール王国で大変なのは国民だけか。国王はポーシオンでかなり儲けたみたいだもん。

「……まさかうちの子供達が主演じゃないよな?」

「何言ってるのよ! エトワールと春香、フローラの三人が主役に決まってるじゃない! あの子達が出演するだけで大ヒット間違いないんだから!」

やっぱりエトワール、春香、フローラの三人を出演させるつもりみたいだ。

いやいや、もうバーキラ王国やロマリ王国産の作品も出来るだろうし、わざわざ僕達が作品を提供する必要はないと思う。

「子供達のプライバシーは? その前に、ソフィアやマリア、マーニは反対するんじゃないか?」
そう言って反対側のソファでそれぞれの第二子のセルト、ユーリ、クルスを抱いてあやすソフィア達を見る。

「また父上や母上が喜びますね」

「録画した映像、もらえないですかね?」

「獣人族の地位向上に役立てばいいのですが」

「み、皆んな、前向きだね」

「はい」

僕の願いは叶わず、ソフィア、マリア、マーニの三人は乗り気のように。

確かに三人は前回の桃太郎ももたろう擬きがお気に入り、いまだに聖域の映画館に観に行っているのは知っていた。

聖域の住民にも人気なんだよな。

超ロングラン上映だよ。

そんな事もあり、聖域内でも次回作を望む声は多いんだとか。

ただ、学校の勉強、聖域の子供達との遊びやそれぞれの趣味、弟達との触れ合いと、色々と忙しいエトワール達が嫌がるんじゃないだろうか。



前回は物珍しさから楽しげだったけれど、子供は飽きるのが早いからね。だけどアカネから返ってきたのは、僕の望みとは違う言葉だった。

「あの子達もやる気満々よ」

「へっ？」

アカネが視線を振ると、そこにはわいわいと楽しそうに話し合うエトワールや春香、フローラがいた。

「わたしのセリフ多くない？」

「エトワールお姉ちゃんだったら大丈夫じゃない。フローラなら難しいかもだけど」

「もう！ その通りだけど、春香もそんなに変わらないよ！」

リビングの床に敷かれたラグの上に寝転び、何やら台本のようなものを開いて、はしゃぐ子供達。どう見ても嫌々には見えない。

アカネの言うように、やる気満々みたいだね。

もう、新しい映画への出演自体は諦めるしかないと思い、なら次回作はどんな物語をベースにするのかアカネに聞く。

「……はあ、分かったよ。で、今度は何のお話にするの？」

前回は桃太郎だ。三人の娘が、犬、猿、雉役の聖域騎士団の団員を従え、鬼（オーガ）を退治す

るというストーリーだった。

わざわざ魔大陸までロケに向かい、本物の魔物を相手にした撮影だったから、次回作も少し不安なんだ。

「フッフッフツ、それは完成してからの楽しみよ」

「えっ!? 教えてくれないの?」

「試写会には招待してあげるわ」

「いやいや、教えてよ」

「だーめ」

アカネは秘密だと言って、頑として教えてくれない。

試写会に招待なんて当然じゃないか。

僕とアカネが話していると、ソフィアがアカネに話しかける。

「アカネさん。例の衣装なのですが」

「ああ、今デザインを描いてるところなの。完成したら出演者全員の採寸ね。それから製作になるわ」

「分かりました。小道具や小物の方もお願いしますね」

「それもあつたわね。分かったわ。そっちは職人に振るから」

ソフィアとアカネは、次回作の衣装や小道具類の話をしていた。そんなの聞いたら、余計に気になるじゃないか。

「ねえ、ヒントくらいはいいんじゃない?」

「ダメよ。試写会を楽しみにしてなさい」

「秘密ニヤ」

「はあ、分かったよ」

どうにも教えるつもりはなさそうだ。アカネだけじゃなくルルちゃんにまで言われちゃった。

これはもう僕にはどうしようもなさそうだ。

すると、アカネが僕に近づき、耳元で小さな声で話しかける。

「そんな事より、あの子達の誕生日プレゼントは、もう考えているの?」

「あっ!!」

「ほらっ、タクミは映画の事よりそっちをちゃんとしなさい」

「わ、分かったよ」

や、やばい。二度の神託とかあつて、色々と忙しくて忘れてた。

エトワール、春香、フローラ。

三人同じ誕生日ってわけじゃないけれど、ほぼ近い日にちだから、毎年誕生日パーティーは一緒

にしているんだ。

当然、誕生日プレゼントもその時に渡している。

今アカネに言われるまで、エトワール達の誕生日がもうすぐだって忘れてたよ。

危なかったあゝ。

因みに、この世界に誕生日パーティーなんて習慣はない。

貴族の子息子女は、お披露目としてパーティーを開くらしいけれど、それも毎年っていうわけじゃないそうだ。

多分、幼い子供の死亡率が高い世界なので、ある程度成長するまで祝うって事をしないんだと思う。

貴族や、裕福な商人や職人は別にして、子供の体調が悪くなった時に、治療院や教会で治療するなんて無理なんだろうな。

創世教の教会があつて、なおかつ光属性魔法が使える神官がいれば、貧困層でも診てもらえるだろうが、教会がない村や集落もある。

ただ、僕の子供達は、毎年誕生日を祝っている。

いや、聖域は誕生日パーティーの習慣が根付いたと言っているかな。

ここでは、新生児の死亡率は驚異のゼロだ。創世教の神官が多く、なんと言っても僕とアカネが

いるし、光の大精霊セレネーの顕現する地だからね。

誕生日パーティーが流行るのは時間の問題だった。

加えてアカネから指摘が入る。

「だいたいガラハットさんからも何か頼まれているんでしょう？」

「うっ」

「聖域騎士団の方は、ちゃんとした仕事なんだから。そっちを忘れてるんじゃないの」

「わ、忘れてはないよ」

「なら、お忙しいタクミは、さっさと工房なり鉱山なりに行きなさい」

「はあ。わ、分かったよ」

映画どころじゃないだろうというアカネの言い分はもつともで、中型輸送機と小型装甲車を造らないといけないんだから、さっさと行けと尻を叩かれてしまった。

台本らしきものを広げて、キャイキャイ楽しそうなエトワール達をチラッと見る。

ああ、気になる。

ソファアではアカネとソフィア、マリア、マーニが、衣装や小道具の打ち合わせを始めている。なんだろう、この疎外感。

はあ、中型輸送機と小型装甲車は勿論だけど、子供達の誕プレも考えないとな。

3 工房でも一人

中型輸送機を造るにも小型装甲車を造るにも、とりあえず素材となるアダマタイトやミスリルが必要になる。

今回の中型輸送機と小型装甲車は造る台数が多いので、在庫だけじゃ心許ない。となると行く場所が決まっている。

「はあ、聖域の中とはいえ、一人で鉱山は寂しいな」

コツコツとノームの鉱山で採掘しながら、思わずぼやいてしまう。

エトワール達は、映画の次回作にノリノリみたいだし、アカネやソフィア達もそちに力を入れているからな。

仕方ないので、僕は黙々と採掘するんだけど、とはいえ、考えないといけない事が多い。

エトワール達の誕生日プレゼント。

装備とかじゃダメなんだろうな。

もう装備は子供には勿体ないくらい一流の物をあげているもの。新しく造るとしても、せめて

もう少し体が大きくなってからだ。

遊び道具も、自転車どころかミニグライダーバイクまで与えている。

プレゼントの方向性を変えないと。

ベタにぬいぐるみとかどうかな。

女の子だから着せ替え人形とかでもいいかもしれない。大きな家に、小さな動物の人形。シル○ニアファミリーみたいなのも喜ぶかも。

コマとか竹馬とかは、男の子のオモチャっぽいけど、ありか。

ケン玉も作ってみようかな。

……さて、エトワール達の誕生日プレゼントも重要だけど、ガラハットさんから依頼されている中型輸送機と小型装甲車も、いつまでも放っておけない。

「はあ、さっさと掘ろう」

一人で寂しいからか、思考があっちこっち行っちゃうな。

今回は数を造らなきゃいけないから集中して掘ろう。

数日間、雑念を振り払い、寂しさを我慢しながら黙々と採掘した。

まだ設計前なので必要量が曖昧だから、余裕を持って多めに採掘したら、少し時間がかかってしまった。

その後、ミスリルやアダマンタイト、魔鋼の精錬をして、飽きてくると中型輸送機と小型装甲車に盛り込みたい機能を書き出したり、そこからラフスケッチしてみたりと、時間は過ぎてゆく。

「どうしよう。本当に手作りのぬいぐるみにしようかな」

そんな作業の中でも、やっぱりエトワール、春香、フローラに渡す誕生日プレゼントをどうしようか悩む。

武器や乗り物みたいなものばかり造っている印象があるかもしれないけど、実は僕はミルドガルドに降り立ってから、ポーションから始まり、色んな事に手を出してきた。

その過程で、糸を紡いで機織り機で布にし、自分やソフィア達用の服を作ったりもしていた。

今は、服飾関係は主にアカネが取り仕切っているけど、僕には糸を提供してくれるカエデがいるからね。

ぬいぐるみくらいなら問題なく作れるんだ。

「ウプッ……マナポーションでお腹タプタプだよ」

ぬいぐるみの事を考えるのはいいが、精錬しなきゃいけない目の前の鉱石の量が多くて、相変わらず僕はマナポーションが手放せない。

「……うん。やっぱりぬいぐるみにしよう。普通の四歳の女の子なら、ぬいぐるみを喜ぶだろう。

せっかくだから、素材にこだわってオンリーワンのぬいぐるみを自作すれば、もっと喜んでくれるに決まってる。うん。そうしよう」

評判が良ければ、セルト達の分を作ってもいいかもしれない。

彼らは男の子だけど赤ちゃんだから、ぬいぐるみをプレゼントしてもおかしくないよね。

そうと決まれば、どんな素材で作るかだな。

中綿は、ゴールデンシープにするか、それとも植物系のワイルドコットンにするか。一応、両方手に入れてから選ぶか。

ゴールデンシープは、それなりに高位の魔物で、何もしなければ大人しいんだけど、怒らせると厄介な奴だ。

とはいえ、毛を分けてもらうのは比較的簡単で、対価さえちゃんと用意すれば、ゴールデンシープも毛を刈ってほしがるくらい。

ワイルドコットンは、未開地に普通に生える綿花めんかの一種。魔素まその濃い土地で育つ野生種で、この世界で高級なコットンと言えば、名前が挙がる。

まあ、高級すぎて、世間ではぬいぐるみの中綿にするなんて事はしないだろうけどね。

ぬいぐるみのガワはどうしようか。

革を使うか、それとも布地にするか。

布地ならカエデに頼めば、いい感じのを用意してくれるだろう。でも、毛がモフモフのぬいぐるみも捨てがたい。

その場合も、わざわざ毛皮を使わずに、カエデ産の布地と、毛に近い糸を出してもらって、それを毛皮っぽく編み込んでもいい。

うん、悪くない案だと思う。

「フローラにはウサギで決まりとして、エトワールと春香はどうしようかな」

兎人うしじん族だから、ぬいぐるみもウサギって安易だけど、それが一番しっくりくる。フローラにブレゼントするならウサギだろう。

エトワールと春香は、どっちかにはクマさんだな。ぬいぐるみと言えばクマ。

あとはイヌかネコ、それともこの世界っぽく魔物をモチーフにするか。悩むところだな。ウサギにしても、クマにしても、本物っぽく作るつもりはない。

デフォルメしつつ、着ぐるみにでも出来そうなデザインにするつもりだ。その方が可愛くなると思うからね。

考えていると、レーヴァが工房に戻ってきた。

「おや、精錬でありますか？」

「うん。かなり量が必要だからね」

「大変でありますなあ」

「手伝ってくれると嬉しいんだけど……」

作業台でサラサラとスケッチを始めたレーヴァに、無理だろうと思いつつ手伝ってくれないか聞いてみた。

「申し訳ないであります。手伝いたいのはやまやまですが、レーヴァは小道具や大道具係だから無理でありますよ」

「そ、そうなんだね」

なんとなく分かつてはいたけど、やっぱり無理だった。

「それよりガラハットさんから依頼された中型輸送機と小型装甲車製作は、ある程度進んだでありますか？」

「いや、今はまさにその鉱石の精錬の途中です」

「タクミ様、頑張るでありますよ。ファイトであります」

「う、うん」

レーヴァからガッツポーズで激励されたけど、ガラハットさんからの依頼に関して、彼女はミリも手伝う気はないみたいだ。

「よし！ こんなものでありますな。では、レーヴァは行くであります」

「そ、そうなんだ」

「はい。ちよつと必要な素材を収納してあるマジックバッグを取りに来たついでに、アイデアを少しだけスケッチしたでありますよ」

何かをスケッチし始めたから、もつと時間がかかるのかと思っていたけど、どうも必要な物を取りに来たついでに、浮かんだアイデアを描きとめただけらしい。

「ふ、ふくん。随分と楽しそうだね」

「大きなセットから小さな道具まで、色々と作れて楽しいでありますよ！」

「楽しそうでいいなあ」

「はいであります！ では、レーヴァはもう行くでありますよ！」

「う、うん。いつてらっしゃい」

ニコニコ笑顔のレーヴァが工房を出て行って、再び僕一人だけになった。

映画の小道具と大道具かあ。それは面白そうだな。

エトワール達の誕生日プレゼントは別にして、僕だって騎士団の仕事よりも映画のお手伝いの方が良かったよ。

4 小型装甲車

気を取り直し、まずは小型装甲車から考えてみる。

装甲車の大きさが決まらなないと、輸送機の搬入口の大きさが決まらなからね。

聖域騎士団の面々は、基本的に無骨な外観を好む傾向にある。

漫画『A○I R A』に出てくるバイクに似た僕のグライドバイクと違い、騎士団のそれは装甲を取りつけ、ゴツゴツした厳ついデザインだ。

「ガラハットさん、ラーテルみたいな好みそうなんだよなあ」

南アフリカに六輪装甲車のラーテルという軍用車両があるんだけど、ガラハットさんはSFっぽいよりもそっちだろうな。

ただ、それじゃ僕の意味は何処にあるのかって思ってしまうんだ。

可能な限り僕好みのデザインに寄せたい。

「とりあえず、僕の好きにデザインしよう。まずはそれをガラハットさん達に見せればいいや」

という事で、今回の小型装甲車は、悪路用の特殊タイヤを使用する六輪にした。それに加え、グライドバイクと同じく低空を飛べるようにする。

まあ、グライドバイクみたいに飛ぶのがメインじゃなく、タイヤによる走行を主に考えているけどね。

「飛ぶ時にはタイヤを収納するか。いや、『バック・トゥ・ザ・サーチャー』のデオリアンみたいにタイヤを動かすか」

収納のギミックは面倒だな。九十度動かせばいいか。タイヤのホイールに、サブの浮遊の魔導具を組み込めば、多少車体が重くなっても大丈夫かな。

ラーテルみたいだと、視界が狭くて操縦しづらいだろうから、運転席の視界は広めに確保したい。ハマーやハンヴィーみたいな運転席にするか。ハンヴィーとラーテルを足して二で割った感じにするか。

どっちにしても騎士団の人達はガチのミリタリー風のデザインが好みだもんな。

「サラマンダーほどガチガチに防御力を求めてないし、見た目は装甲車だけど、出来るだけ軽くしてみるか。その方が浮かせる時にも魔力の消費を抑えられる」

離島には、それほど強い魔物はいないうえ、逃げ出した族長達もレベルは高くないし、装備も鉄製の武器だ。

どんなに頑張っても、装甲に傷をつけるのも難しいと思う。しかも、魔法を使える人間もほぼいなかったしな。

だから多少装甲を薄くしても、付与魔法による強化で十分カバー出来るだろう。

「材料が少ない方が錬成も楽だしね」

そのあたりを考慮しながらデザインしていく。

本当は必要ないだろうけど、一応法撃用の魔導具も設置しないといけないだろうな。きつとガラハットさん達がつけるとうるさい。

となると車体上部に、可動式の法撃魔導具を一機つけるか。
威力はほどほどでいいかな。

「カラーリングはどうしようか。騎士団の人達って、派手な色は嫌がるしな」

僕も軍用の車両に派手なカラーリングはどうかと思うけど、あの離島でカモフラージュカラーにする意味はあまりないんだよね。

あとはそんなに考える事はない。

後部のハッチからの格納スペース。空間拡張するので、乗り心地はあまり良くないだろうけど、

それなりの人数を乗せられる。

緊急事態には、数台の小型装甲車で、離島の住民を救助して回れるようにしとかないな。

サラサラと設計図を描き上げる。サイズも決まったので、使用するアダマンタイトやミスリル、魔鋼の量も計算する。

「多めに掘ったから八台錬成しても余裕かな」

魔物素材は、内装の一部に使うくらいで、量も知れている。魔力を供給する魔晶石のサイズも、それほど大きな物は必要ない。

まあ、サラマンダーのちっちゃい版だしな。

「でだ。カラーリングは結局どうしようか？　うちの装備には珍しいけど、白く塗っちゃうか。まあ、実際に塗るわけじゃないけど」

軍用車に白は普通は使わない。確かPKOに派遣する車両は、中立を表すために白に塗ってた記憶している。

離島には、敵対勢力は存在しないので、白い車両ってありなんじゃないかな。汚れやすそうだけど、それは防汚を付与しておけばいい。

ちょっと派手になるが、そこはいったん我慢してもらおう。

「さて、今日は誰か見学に来るかな？」

一通り準備を済ませ、聖域騎士団の倉庫の一つを訪れた。

見学者云々^{うんぬん}というのは、この前オケラ型地中探索機^{たんさくき}オプスを錬成した時なんかは、誰一人見学者がいなかったからだ。

騎士団が運用する機体じゃなかったし、仕方ない。

今回は騎士団に配備されるものだからゼロって事はないと思いたい。

ガランとした倉庫で準備をしていると、ガラハットさんとヒースさん、あと若手の騎士団員が数人、姿を見せた。

「おお、間に合いましたな」

「タクミ、お疲れ。今から錬成か？」

「ガラハットさん、ヒースさん、ちようどよかったです」

二人は騎士団の団長と隊長として立ち合いに、若手の騎士団員は、自分達が離島で運用するからだろう。

「じゃあ、とりあえず一台錬成しちゃいますね」

僕はガラハットさん達に声をかけて、魔力を練り上げ集中する。

「錬成！」

地面に描かれた魔法陣が光り、まとめて置かれた素材の山をその光が包み込む。

変化は一瞬。

次の瞬間、僕のイメージした通りの小型装甲車が、倉庫に現れた。

「ほおほお。なかなか濃^む好みの形じゃな」

「白い車両つてのもいいですね。明確な敵がない離島に派遣するなら、住民からも怖がられにくいんじゃないですか」

ガラハットさんとヒースさんには好感触みたいだ。

よかった。色を白にしたのも抵抗はなさそう。

「細かな調整と仕上げをしますね」

「うむ。頼む」

僕は錬成した小型装甲車の中に入り、操縦席まわりや、攻撃用の法撃魔導具を仕上げる。

地上を走ると低空を滑空する二通りの動作を、極力同じ感覚で行えるようにしてあるので、その分の調整は少しだけ面倒だった。

だが、これで普段サラマンダーやグライドバイクに乗っている騎士団員は問題ないだろう。

「OKです。テストお願い出来ますか？」

「了解した。ヒース、若いのを連れて機動テストを頼む」

「了解」

ガラハットさんに完成を告げ、試運転をお願いすると、ガラハットさんは、ヒースさんに命じた。実際にこの小型装甲車をメインで運用するであろう若手の騎士団員は、待ちきれないとばかりに小型装甲車へ走っていく。

念のため、マナポーションを飲み、皆んなが試運転から戻るのを待つ。

その間、装甲車の名前を決めてしまおう。

「ガラハットさん、あの小型装甲車の名前って、どうします？」

「名前か。ふーむ、確かサラマンダーは、火の大精霊サラマンダー様から名をいただいたんじゃないかな。では、サラマンダーIIでどうじゃ。サラマンダー様の名を変えるのも不敬じゃからな」

「サラマンダーIIですか。まあ、いいんじゃないですか」

実際、量産機の名前にこだわりのないの、サラマンダーIIでもミニサラマンダーでも、僕は構わない。

その名がついていれば、サラマンダーも喜ぶからいいか。

そうこうしていると、サラマンダーIIが戻ってきた。

「タクミ、これはいいぞ。サラマンダーほど大きくないから使い勝手がいい。しかも、悪路ではグ

ライドバイクと同じような使い方も出来る。騎士団にも数は必要ないが、少し欲しいぞ」
「アレ、いいですね。装甲がしっかりしているので、スタンピード制圧にも使えそうです」
「僕はグライドバイクの方が好みですけど、ドワーフ達の土精騎士団は欲しがるんじゃないですかね」

ヒースさんや若手の騎士団員の評判は良さそうだ。

「もともとガラハットさんにも言われて、各騎士団に二台ずつ錬成する予定ですよ。あとは使ってみて追加配備を考えてください」

「うむ。それがいいな」

「じゃあ、サイズに関しても問題なさそうだから、このまま残りも錬成しますね」

「ああ、頼む」

ガラハットさんからGOサインが出たので、残りの七台を錬成するため、魔法陣に素材を積み上げていく。

サラマンダーⅡのサイズが決まったので、これで中型輸送機の大きさも決める事が出来る。遠回りだけど仕方ないね。

5 中型輸送機

小型装甲車サラマンダーⅡが完成したので、やっとそれを輸送する中型の輸送機に取りかけられる。搬入するハッチの大きさが決まったからだ。

格納庫の大きさは気にしなくてもいい。空間拡張でどうにでもなるからね。

ただ、ハッチの大きさに空間拡張は関係ないので、小型装甲車が出し入れ出来るサイズじゃないといけない。

ある程度機体の大きさが確定したので、次はデザインへと移る。

「さて、燃費を考えると、自然と飛行機の形に落ち着くんだよなあ」

飛空艇ひくうていのウラノスは飛行機ってデザインじゃないが、ガルーダやサンダーボルトは航空機のデザインから逸脱いつだつしていない。

レーヴァのために造ったドラゴンフライも、トンボをモチーフにしているものの、航空機として極端におかしなデザインではないと思う。

で、今回の中型輸送機なんだけど、いわゆるワンオフ機じゃなく、量産機の扱いになる。

「さて、翼形はどうするか……」

ガルルダは後退翼とデルタ翼の中間みたいな翼だけど、輸送機ならテーパー翼もアリなんだよな。とはいえ、かつこよさなら後退翼かデルタ翼かな。

可変翼つてのもあるけど、わざわざ動かす意味がない。なにせ、浮かべるだけなら浮遊の魔法で十分だしな。

極端な話、翼形なんて考えなくてもいいっちゃいい。魔法技術があれば、空力特性を無視する事も可能だ。

まあ、魔力の燃費を考えれば、ある程度の空力特性と翼形による機体安定は無視しちゃダメだけどね。

「輸送機だから高翼機かなあ」

翼の位置も、旅客機みたいに低い位置にある低翼機と、軍用の輸送機みたいに高い位置にある高翼機がある。

それぞれにメリット、デメリットがあるが、輸送機のようにカーゴスペースを確保したい場合には、高い位置に翼を設置する高翼機が多い。

ここはガルルダがそうであるように、高翼機一択だ。

翼の形状や取り付け位置による効果と、魔法による結界や動力のバランスはよく考えないとな。

ワイバーンや飛竜タイプのドラゴンなんかも、空を飛ぶ時に風の結界を纏っている。僕の造ったウラノスやガルルダを始めとする飛空艇も当然、各種結界を張っている。

その結界の魔法と浮遊の魔法、それと推進用の風魔法があるから、空力や揚力にこだわらなくても大丈夫なんだけど、魔力の燃費を考えると、どうしても飛行機の形へと落ち着くんだよな。

ただ、僕の前世は普通のサラリーマンで、航空系の技術者だったわけじゃない。

記憶にある実際の航空機やアニメを参考にする程度だから、結局最後は魔法でのゴリ押しになっちゃうんだよね。

カリカリとデザインを何枚も描いていると、工房にレーヴァが入ってきた。

「あっ、レーヴァ。手伝ってくれるのかい？」

「いえ、違うであります。ちよつと必要な物を取りに來ただけでありますよ」

「そ、そっか」

中型とはいえ輸送機四機を錬成するとなると結構大変だから、手伝ってもらえたら嬉しかったんだけど……流石に少しがっかりする。

「ふむふむ。タクミ様は、イメージイラストを描いているでありますな。翼の形が色々あるであります。テストが大変そうでありますね」

「そうなんだよね。だからレーヴァが手伝ってくれと嬉しいんだけどな」

「申し訳ないですが、レーヴァは忙しいでありますよ」

「……残念だけど仕方ないか」

「はい。じゃあ、タクミ様も頑張ってくださいであります」

ヒラヒラと手を振り工房を出ていくレーヴァ。相変わらず、既存の物を造るのには興味がない。

それは僕も同じか。

普段、ノルマとしてポーシオンを作る事が多いからか、それ以外の時は自由に新しい物を造りたいんだよな。

仕方ない。

気を引き締めて早く中型輸送機を造ってしまおう。

「主翼は、速度重視で三角翼……デルタ翼かな。低速時に安定させるのは、浮遊の魔法で大丈夫だろうしね」

推進用の風の魔導具は、主翼の両側に取り付ける感じでいいかな。

垂直尾翼は、二枚を逆ハの字にするのがかっこいいか。

カリカリとデザイン画を描いていく。

これ、カーゴ部分がなければエイみたいだな。

「主翼の大きさもそんなにいらないな。とはいえ、そうなるとズングリしたシルエットになっちゃ

う……いや、機体の大きさが小ぶりだから可愛くてありか」

騎士団の輸送機に、可愛さは必要なさうだけど。

ズングリしたエイっぽいシルエット。うん、いいんじゃないかな。

離島にはガルダー用の滑走路があるけれど、この中型輸送機は垂直離着陸を可能にする。離着陸時に、多少魔力を多く消費するが、そこまで気にするレベルじゃない。

「よし、こんな感じでいいかな」

何枚もデザインを描いてイメージを固め、ほぼ完成予想図が出来上がった。

「で、ここから設計図だな」

設計図を描くのは面倒ではあるものの、同じ機体を複数錬成する場合、これがちゃんとしていないと、まったく同じ機体を錬成するのが難しくなる。手間だけど、急がば回れだ。

量産機の錬成で微妙に気分が乗り切らないのを我慢しつつ、そしてレーヴァ達は楽しそうだなあと羨みつつ、僕は中型輸送機を完成させるべく作業を続けた。

6 顕現

タクミが小型装甲車や中型輸送機の製作に手を取られている頃、ロマリア王国のある場所で、変化が訪れていた。

異端の鬼才錬金術師ハミット。

神の御業である生命の創造を目指す彼は、一種の天才ではある。

そしてハミットは、とうとう独学で生命創造の第一歩——アダム・カドモンの製作にまでたどり着いた。

ただ、そこから先、あと一步で躓いていた。

「古文書の類いも漁ったが空振りばかり。本気で王家の禁書庫に忍び込むか」

大陸各地の遺跡から出土した壁画や調査書の写しも手に入る限り調べたが、人体錬成のヒントとなるものは見つけれなかった。

そんなハミットに転機が訪れる。

培養液のプールに浮かぶアダム・カドモンが、ボコボコと脈動を始め、大きくなり始める。

「!?」

それを察知したハミットは、急いで立てかけてあった愛用の魔術杖を手に取り警戒する。

あきらかに自分主導での反応ではない。では何か？ 咄嗟に外からの干渉だと判断し、いつでも攻撃出来るよう魔法を待機状態にする。

やがてアダム・カドモンは、大人の男の姿に変化し始め、数分で反応が収束した。

「おいおい。物騒な魔法はやめてくれ。俺に敵対する意思はない」

アダム・カドモンだったモノは起き上がり、培養液のプールから上半身を出すと、手をヒラヒラさせて言った。

「お前は何者だ？」

「俺は別世界の神だ」

「……神？ 神など大仰な名乗りをするわりに、存在感は希薄だな」

「クッククック、それは仕方ない。神ではあるが、俺は下位世界のマイナーな神だ。それに、この世界に潜り込むのに、本体のごく一部を分けてるからな。とはいえ、本体でもこの世界の主神と比べれば、ドラゴンとアリのくらいの差があるけどな」

神だと言われてハミットが訝しむのも仕方ない。目の前の自称神からは、その程度の存在感しか感じなかった。それこそ今のハミットでも討伐可能だろう。

そして、脆弱な存在感の理由を聞かされても信じるに値しないとハミットは考える。ただ、アダム・カドモンを依代に顕現した事を考えれば、尋常な存在ではないとも言えた。本人？ 本神？ が言うように、本物の神である可能性も捨てきれない。

「それにな、もし、これ以上力があつたとしたら、直ぐにこの世界の主神に見つかって、今の俺なんて一瞬で消されちまう。まあ、完全体だとしても一瞬で滅されるのは変わらないが」

「ふん。そのせいで俺でも勝てる程度の存在感なのか。で、俺が苦勞して造ったアダム・カドモンを消費してまで顕現した理由は？」

ハミットの疑問は、何故自分のもとに顕現したのかという事だ。

今回、ハミットの造ったアダム・カドモンを依代に顕現したが、顕現するだけなら他の方法もあつたはずだ。

「そう怒るな。この依代を使ったお陰で、この世界の主神の目を誤魔化せているんだ。俺が自力で顕現しようものなら、直ぐにバレて消されるかもしれないからな。それとここに来たのは、お前が面白い事をしているのを感じたからだな。人体錬成とは、ぶっ飛んだ研究しているじゃないか。実に面白い」

「……はあ、ふざけた奴だ」

わざわざ自分のところに顕現した理由が面白そうだという事に、貴重なアダム・カドモンを使わ

れたハミットの苛立ちも呆れに変わる。

「お前も一応神と名乗る存在だ。顕現したついでに、人体錬成のヒントでも置いていけ」

「クックククククッ、神である俺に対して不遜すぎる態度だな」

「勝手に俺のアダム・カドモンを依代に顕現しておいて、敬ってもらおうなどと思うな」

「まあ、いい。俺も敬い奉られるタイプの神じゃないしな。で、人体錬成だったか。残念ながら、人が成せるのはここまでだ」

「んっ？ どういう事だ」

その答えに混乱するハミット。

それはそうだ。錬金術が創造するフラスコの中の小さな人擬き——ホムンクルスは古文書の中にしか登場しないが、実際に成功した事例があつたとハミットは思っているのだから。

「ホムンクルスはなかったと言うのか？」

「いや、ホムンクルスならお前も直ぐに造れるぞ。お前、この場所に結界を張っているだろう」

「ああ、極力余計な要素を入れたくないからな」

「アダム・カドモンがホムンクルスにならないのは、それが理由だ」

神らしき存在が言うに、アダム・カドモンの錬成時、周囲に偶然浮遊していた魂が定着し、ホムンクルスとなるという。

「結果が邪魔をしていたのか……」

「いや、結果を張ったのは間違いないと思うぞ。偶然漂^{たふ}っている魂任せじゃ、人間じゃなくネズミやイヌ、ネコの魂が入り込む可能性もあるからな」

「なるほど。しかしそれでもホムンクルス止まりなのか」

ホムンクルスの錬成に至らなかったのは、魂が理由だと分かったが、魂の問題をクリアしたとしてもホムンクルス止まりかとハミットが落胆する。

「それは仕方ない。現世を浮遊するのは、魂の残り滓^{かす}、残滓^{ざんし}だ。残滓じゃホムンクルスが限界だと思うぞ。死した魂は、天界に昇^{のぼ}るからな。そもそも魂は、その世界の主神^{つみかみ}が司^{つかさど}る。本体の俺だって無理だ。人間がどうこう出来る範疇^{はんちゆう}にない」

「では、人間の創造は不可能なのか……」

「ほんのごく稀^{まれ}に未練を残して彷徨^{さまよ}う人の魂があるから、それが入り込めば可能っちゃ可能だな」

「確率は低く、しかも運任せって事か」

「その通り。主神の権能だけの事はあるな」

「はあ……」

魂は、神の中でも主神でないと扱えないレベルのものだった。

今までの努力が泡と消えた気がして、呆然とするハミット。

「魂の創造や修復、そして輪廻^{りんね}転生は、神の中でも本当に力ある主神クラスじゃないと無理だ。だあーが、そんなお前に朗報だ」

落ち込むハミットをニヤニヤしながら見て、軽薄そうに話しかける神らしき存在。

「朗報？」

「ああ。俺には今、この世界の天界に封印^{ふういん}されていたのを、こそっと掠^{さら}め盗^とった魂が四つある」

「……それは、大丈夫なのか？」

このハミットの問いには、二つの意味がある。

この世界の天界から魂を盗んで大丈夫なのかという事と、封印されていた魂を使って大丈夫なのかという事だ。

「俺は魂を扱える格にないからな。どんな魂か詳しくは分からん。直ぐに輪廻の輪に流せない欠陥品の魂なのかもな。とはいえ、魂には違いがない。しかも真っ白に修正されていない魂だ。お前にはその方が都合がいいだろう？」

「主神が直ぐに修正出来ないと判断して封印していた魂など、本当に大丈夫なのか？ それに、俺にとって都合がいいとはどういう事だ？」

「真っ白な魂だと、赤子から育てる事になるぞ。まあ、お前がそれを望むなら構わないがな」

「……赤子の世話は無理だな」

「だろう」

本来、輪廻の輪に戻される魂は前世の記憶や経験を削除し、綺麗にしてから流される。だが盗み出した魂は、死した後、天界で封印されていたものだと言う。

主神である女神ノルンが直ぐに輪廻の輪に戻せず、封印するしかなかった魂と聞くと不安になるが、赤子から育てるのはごめんだった。

盗まれた魂は、ノルンにより人以外の要素を排除し、人としての部分がこれ以上壊れないよう封印されていたものだ。これから長い時間をかけて修復される予定だった。

ただそこでハミットが待ったをかける。

「まず、服を着ろ。いつまで俺は、野郎の裸を見せられているんだ」

「いや、今それ重要？」

ハミットからバサツと投げ渡された服をそう言いながらも受け取り、神らしき存在はゴソゴソとそれを着る。

「さて、話を仕切り直して、まず俺が持っているのは四つの魂。どれもこれも人以外の要素の影響で歪んだり、壊れたりしたものだ」

「……そんな魂で大丈夫なのか？」

「そこは流石に創世の主神。なんとか人の魂として成立する程度に修復されてある。まあ、流石に

このまま輪廻には流せないだろうがな。それに俺も腐っても神の一柱だ。魂を創り出したり輪廻転生を管理したりは無理だが、ほんの少しならいじれる。ギリ、人として成立すると思うぞ」

「いや、そこは言い切れよ。しかもギリなのかよ」

聞けば聞くほど、不安になるハミット。人以外の要素が混ざっていると、壊れているとはどういう事なのだろうか。安心出来ない。

しかも「思う」などと言うものだから、不安は増すばかりだ。

「それは仕方ないさ。俺の権能にない事だから。とはいえ、手につけられないほどやばい奴ってのはなさそうだが」

「信用ならんな」

「そこは妥協しろ。お前は、人体錬成が成功すればいいんだからよ」

「……それもそうか」

どうにも不安はなくならないが、ハミットも己の目的である人体錬成が成功するなら、様々なものに目を瞑る事にする。

「そうだ。お前の名は？ いつまでもお前呼びは神に対してまずいだろう」

「そうだな。真名を教えるわけにはいかないから、プ・ラ・ン・ク・とでも呼んでくれ」

「偽りの名で大丈夫なのか？ 神とは信仰が力になるのだろうか？」

「だからだよ。これ以上俺の力が増すと、この世界の主神に滅される確率が高くなる」
 「なるほど。プランク……ふざけた名前だが、お前に合っているか」
 「おう。しばらくの間、よろしくな」
 プランクと名乗る異世界の神。
 異端の錬金術師のもとに、異世界から紛れ込んだ神が訪れ、ミルドガルドに暗雲が立ち始めめる。

7 四つの魂

お互いの名乗りを終え、話は今後の事に移る。
 「さて、プランク。お前がアダム・カドモンを依代にしたせいで、俺はまた一から四体分のアダム・カドモンを錬成しなければならんだが」
 「一度錬成に成功したなら、四体追加するのも簡単だろう？ それに、残りの魂を使った四体は錬成してお終いじゃないからな」
 「どういう事だ？」

「俺は依代を使って顕現してから、自力でこの世界の大人のサイズになったが、残りの魂の分はそうはいかない。今時点の魂の記憶にある状態まで大きくなるには、それなりの時間がかかる。しかも、どうやら四つの魂は、普通じゃないみたいでな」
 「それは普通ではないだろう。女神が直ぐに輪廻の輪に戻せないほどの異常があるのだから」
 「いや、まあ、そのせいでな、錬成後成長する時間に差があるみたいだ」
 プランク曰く、ミルドガルドの天界から盗み出した魂は死亡した時と近い年齢まで成長するため、アダム・カドモンと魂を錬成してから、完成までにそれなりに時間がかかるらしい。
 そして四つの魂はそれぞれ状態が異なるため、錬成して培養液のプールから出られるようになるまでの時間に、魂ごとに差があるだろうとの事だ。
 「……ふん。で、どれがどんな魂か、お前には分かるのか？」
 「力はなくとも、魂のおおまかな鑑定は出来るし、多少いじれると言ったろう。いじる方はあとでどんな影響が出るか分からんがな」
 ヘラヘラと無責任に言うプランク。

「なら、その四つの魂を鑑定しろ。錬成するかは俺が決める」
 「俺はこれでも神なんだけどな。敬うって気持ちが一ミリもないな。いつそ清々しい」
 「創世の女神ノルンならいざ知らず、異界の神擬きを敬う趣味はない。それより早く鑑定しろ」

「はあ、はいはい。神使いの激しい奴だ」

軽薄そうな笑みを浮かべ、プランクが作業台の上に直径二センチほどのガラス玉のような物を置いた。

「……魂とはこんな形なのか？」

「んなわけあるか。これはこの世界の主神が、しばらく封印しながら癒すために、こんな形へと変えたんだろう。魂なんて、神でもなければ目に見えないぞ」

「ふーん。そんなものか」

ハミットが興味津々に、四つのガラス玉擬きを観察する。この何事にも強い興味を持つのは、錬金術師のさがかもしれない。

「まずは、これかな」

四つのガラス玉のような物のうちの一つを手取るプランク。

「……名前は、エリザベス。若い女だな。へえ、僅かに穢れた精霊の残滓を感じる。はあ、歪んだ精霊の依代になってた感じか」

「名前がエリザベスで、若い女、邪精霊とくれば、旧シドニア神皇国の皇女だったエリザベスカ。邪精霊の依代だった魂なんか使っていいのか？」

ロマリア王国の辺境に暮らすハミットも、シドニア神皇国崩壊の経緯は耳にしている。そのシド

ニアの皇女の名も知っていた。

ただ、プランクの言う穢れた精霊の残滓というワードが気になる。邪精霊の依代となっていた影響がゼロとは思えない。

「それは問題ない。他も含めて人以外の要素は取り除かれてある。流石一つの世界を統べる主神だな。影響が皆無かと問われると分かんが、あったとしても人格に多少影響がある程度だろう」

「おい。不安になる事を言うな」

「仕方ないだろう。この世界の主神が時間をかけて修復しないとダメだった魂なんだ。俺如きに、どんな影響があるか詳細までは分からないさ」

「はあ、まあ仕方ないか。俺は人体錬成が出来ればいいしな」

プランク曰く、人ならざるモノが錬成される心配はないらしい。

それならと、ハミットは多少の事は妥協する。

「このエリザベスの錬成が、一番早く定着するだろう。精霊の影響がなければ、まったくの一般人と変わらないみたいだからな」

「ふむ。なら一体目はソレにするか」

ハミットはプランクの勧めに従い、最初にエリザベスの魂を錬成しようと決めた。

しかし、早速アダム・カドモンの錬成準備を始めようとすると、プランクから待ったがかかる。